

## 入澤彩賞を受賞して

東京女子医科大学生理学（第一）講座

宮田 麻理子

(2014年度 第5回入澤彩記念女性生理学者奨励賞 受賞)



この度、第5回入澤彩記念女性生理学者奨励賞をいただきました。浅学非才な私には身に余る光栄で身の引き締まる気持ちで一杯です。何よりも本学の生理学教室出身であり尊敬する入澤 彩先生の賞をいただいたことは、私だけでなく教室員にとってもうれしいことです。入澤 彩先生は女性生理学者の草分け的な存在でした。東京女子医科大学を卒業された後、慶應大学・富田恒男先生の下で医学博士を取得され、母校の生理学教室の助教授として、ガラス微小電極を用いた網膜の研究で当時最先端の研究をされていました。入澤宏先生と結婚された後は、広島大学にお二人で移られました。その時、助教授のポストを捨てて副手として広島大学に移られたのでした。その後、宏先生とともに世界的に有名な心筋の研究を数多く発表されました。彩先生世代の諸先輩方は「女性が結婚しても研究を続けられる時代」の道を築かれました。しかし、女性が実力に見合った地位を得る事も、やりたい研究をすることもまだまだ困難な時代でした。このようなご経験から、先生のご寄付と遺言により女性生理学者を奨励するためにこの賞が創られました。

この原稿には、第120回日本解剖学会総会・全国学術集会/第92回日本生理学会大会の男女共同企画推進シンポジウムで女性研究者のキャリアパスをテーマに講演した内容も盛り込んで欲しいとのご依頼でしたので、入澤 彩先生のその思いを回想し若い人達へのエールのメッセージとして書かせていただきたいと思います。私は、大学院博士課程を経て学位取得後、理化学研究所、生理学研究所、東京女子医大と三つの機関に異動し

ました。色々な機関に在籍した事で、多様な研究手法と研究分野を知る事ができ、多くの研究者の先生方と出会うことが出来ました。とりわけ若い時期に理解のある指導者（川上順子先生、伊藤正男先生、狩野方伸先生、Ray Kado先生、井本敬二先生）に恵まれ、女性という事を意識することなくのびのびと無我夢中で研究する機会を与えていただきました。同じポストだった仲間達も今では大学教授や研究所のPIになっておられます。これら指導してくださった先生方や仲間から学んだ事が多くあります。まず大学院、ポスト時代に研究の基礎であるきちんとした研究技術と研究に対する考え方を身につけてほしいということです。実験上のトラブルシューティングも経験を積む事で出来るようになります。時間が無尽蔵にある時に、出来るだけたくさん実験し、失敗と成功を繰り返かえて、経験と確かな技術を育むことが大切だと思います。ポストクや助教になり、ある程度自分の裁量で実験を進められるようになったら、実験結果を十分に考察し、次に行うべき実験の優先順位をつけられるようになりたいものです。自分の行っている研究のエンドポイントをどこに置くかでその研究の質も激変します。ある程度、実験手法が身につけてくると、焦点を絞らず発散的に研究を進める若者を多く見受けます。紆余曲折することも時には大切ですが、確固たる現象を見いだしたならその結果をどのように発展していくかに注力する必要があります。一方で、自分で論文・総説を執筆できる事も最も重要な要件の一つです。特に、何が新規で作業仮説は何か？どのように論理展開をして表現するかが大切で、

これは英語力だけではなく個々の論理力に依存するように思います。さらに、准教授クラス以上は自分独自の実験系を持っていることが必要になってきます。蓄積された自身の研究論文から科学的概念が提示できるようになりたいですし、外部の競争的研究資金を取ることも必須要件になってきます。研究指導能力、マネジメント能力も問われるでしょう。研究者はこのようにエンドレスで成長しつづけなくてはならず、不断的努力が必要な職業です。一人よがりにならず周りから多くを学ぶ姿勢や協調性を大切にしてください。自分の科学的好奇心がなくなったらそこで研究者人生はストップしてしまうので、常に初心忘れず好奇心を持ち続けたいと私自身も思います。一方で、大学の教育職は教育歴も必須になりますし、教育に対しても熱意が必要です。

これらに加えて、女性は研究者の成長期である30代にライフイベントと重なるケースが多く困難が多いのも事実です。私も、生理学研究所の准教授であった6年間、夫とは東京と愛知県で別居する形になりました。その間に子どもを授かり、出産後は母子だけの生活が始まり、6人の地元のファミリーサポートの方にお世話になりました。子育て、介護はどうしても女性に負担がかかるものです。公的サービスをフルに利用し、夫や周りの人も巻き込み協力を得ながら、あきらめずに自己実現を図ってください。いざと言うときに職場の理解も必要ですので、日頃から信頼関係を築く

事を心がけていただきたく思います。男女の役割分担を意識しすぎるのはキャリアパスの邪魔になります。ハードルが高い課題を与えられたら、女だから・若いからと怯まず果敢に挑戦していただきたい。一人でも多くの方が将来の指導的立場をめざしてがんばり続けることを心から願っています。そのためには私も含めて身近なロールモデルを見つけてどんどん利用し、何でも相談してください。特に女性は身近なロールモデルを見つけることで色々な情報だけでなく、精神的な支えを得られると思います。一人一人が輝ける研究者になって欲しいと願っています。

#### 略歴

- 平成7年3月 東京女子医科大学・医学部・大学院博士課程卒業・医学博士 学位取得
- 平成8年4月 理化学研究所 基礎科学特別研究員
- 平成10年9月 東京女子医科大学 医学部 第一生理学教室 助手
- 平成14年8月 国立共同研究機構・生理学研究所・助教授
- 平成20年7月 東京女子医科大学・医学部・生理学(第一)講座・教授
- 平成26年4月 東京女子医科大学・医学部・生理学(第一)講座・主任教授